武蔵野市 水環境連続講座
水の学校 News Letter 6

2015年1月発行
発行元：「水の学校」事務局
tel：0422-60-1867
http://www.city.musashino.lg.jp
facebook「武蔵野 水の学校」
最新情報配信中！

武蔵野市水環境連続講座「水の学校」とは？

「水の学校」は、市民のみなさんといっしょに、水を知り、考える 7 回連続のシリーズ講座です。くらしの中の身近な水循環、上下水道の役割や、水に親しみ水を楽しむ知恵、そして世界規模の水課題、地球規模の水循環まで、水をとりまくさまざまなテーマをとりあげ、楽しみながら考えを深め、行動へつなげます。

連続講座レポート　第６回 ふり返りから今後のアクションへ！～水からはじめよう

12/13（土）の連続講座第 6 回は、「振り返りから今後のアクションへ！～水からはじめよう」を実施しました。これまでの内容や受講生からの声を受け、第６回と続く第７回の２回のワークショップを通して、受講生の方が得たものや周囲へ伝えたいことを、「水の学校」の未来のプログラムとしてまとめ、それを宣伝するための魅力的なチラシ案を作り、グループごとに発表します。

「水の学校」、今年度のゴールは…？

「水」は、私たち人間だけでなく全ての生きものに欠かせないものであり、生命、環境、産業、歴史など様々な分野で私たちの生活と関わっています。身近でどこにでも現れるからこそ捉えるのが難しいといえるかもしれません。

これまでの講座の中でも、「学んだこと・伝えたいこと」について話し合う機会を設けてきましたが、今回は「プログラム作り」という具体的な課題が出てきたことで、「水の学校」全体のねらいや、講座のまとめとしての発表がどのようなゴールをめざすべきなのかということについて、受講者の中から質問がありました。そこで、水の学校スタッフも交え、改めて「水の学校」の目的を話し合い、お互いの考えをより深く知ることができました。

「水の学校」の初年度であるため、将来の姿がはっきりとは見えない中で話し合う難しさはありますが、まずはこれまでの講座を通じて発見したこと、驚いたこと、面白かったことなどをふり返り、それを今後多くの人に共有してもらうためにどのように伝えたらよいか、またそれぞれが興味を持ったテーマをより深く学ぶプログラムを考えてみようということになりました。

武蔵野の水をめぐる４つのテーマ

プログラム作りは、「水に関して伝えたいテーマ」ごとにグループに分かれて行います。第４回講座で出されたA～Dの４つのテーマに加えて、「水と防災」「清流復活」「水のおいしさ」など視点をしぼった案や「水をお金に変換して水に関する諸問題やしくみをわかりやすく見える化する」という水を捉える視点の提案など、様々な意見が出されました。「どれも重要な事柄で、それぞれのつながりを考えるとテーマを区切ることが難しい」「概念と、伝え方の手法を分けて考える必要がある」といった意見もあり、A,B,C,D の４グループに分かれて、その中でさらに具体案を練っていくことになりました。

水に関して伝えたいテーマ

- **A　下水のゆくえ（武蔵野市の水処理）**
- **B　水の今昔（生活と水の歴史）**
- **C　水の安全と水質**
- **D　水の循環（ひとり一人ができること）**

この日は、プログラムの対象やメッセージ、メインの活動は何かといった骨格を話し合い、1/24（土）の最終回で詳しい内容をまとめて発表します。

受講生の声より

- ●これまで学んできて、水と生活に興味が深まりましたが、今後のテーマは難しい。
- ●受講を通して、自分が面白かったこと、楽しかったことをうまく伝えられたら良いなあと思います。
- ●振り返りからやっと水のことがわかり始めた今、これをつなげていくための作業はなかなかテーマが広く、ひとつにしぼるまで時間がかかりました。
- ●今までになく深いお話ができたのではないかと思います。
- ●アイデア出しまでだったが、いろいろな見方で検討できた。
- ●どのテーマも難しそう…ただ、楽しく知ることが大切？
- ●抽象→具体化→私は何を為すか（実践・実行・日常へ）
- ●ひとつのテーマに沿っても意見が分かれるので大変だなあと思いました。
- ●中間まとめをしながら有意義であることを再認識しました。
- ●皆さんの「水」に対する意識がとても高く、話し合いも盛り上がりました。

水コラム no.6: 武蔵野市内の用水路の思い出～受講生のお話より

「水の学校」受講生のおひとり、良島賢亮（ながしま・けんすけ）さんは１歳の時から 70 年以上境地域で育った、生粋の武蔵野っ子です。小さい頃は市内を流れる用水路で遊んでいたそうで、前号に掲載した第５回講座「むさしのの今昔をめぐる～水のまちあるき」の際には、水辺にまつわる子どもの頃の思い出をお話ししてくださいました。

講座終了後に幼なじみのみなさんと改めて記憶を整理し、さらに補足もいただきましたので、その内容も含めて武蔵野市内の用水路の昔話をご紹介します！

「品川用水」で泳いで叱られたことも。

昭和 20 年の終戦を挟んだ前後３～４年間の「思い出」です。今からおよそ 70 年前には、武蔵野市内にはたくさんの小さな用水路がめぐり、人々はその水を日々の生活に利用していました。今の六中の前の通りには、玉川上水から分かれた「品川用水」が流れていました。私たち子どもは、よくここで泳いで遊んでいて、朝礼で校長先生から「危ないので用水で泳いではいけません」と注意されたことを覚えています。当時の玉川上水は今よりもずっと水量が多かったので、子どもはとても近寄れない川でした。

また、市内には仙川と用水路が立体的に交差している地点が、私が知る限りでは２か所ありました。１か所は境２丁目都営住宅のところ（かわばた公園の北側）です。ここは東西に流れる仙川の上を南北に用水が流れ、上を流れる用水路部分が凹時型コンクリートの水路になっていました。この用水は、下流で当時の武蔵野第二小学校の前を流れていたので、「第二の川」と呼んでいました。

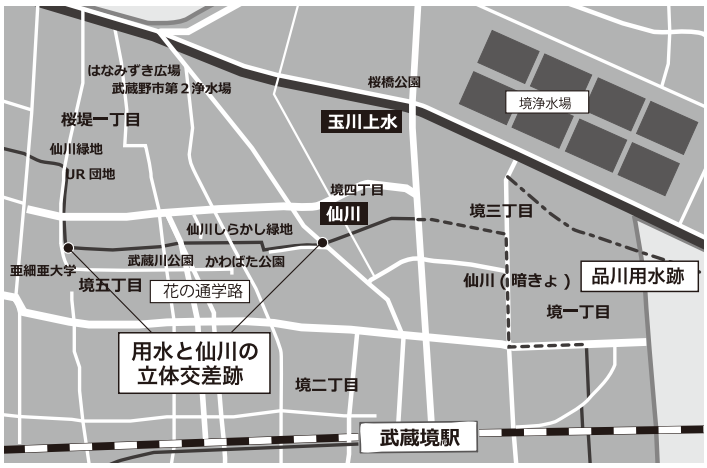
もう１か所は、境２丁目と４丁目及び５丁目の境界地点（武蔵川公園近く）です。玉川上水の分水路から枝分かれして流れて来ていた用水路は、現在は埋め立てられて通路となっており、「花の通学路」と呼ばれています。私たちは、下流に竹林と籠造り場があったので、「竹屋の川」と呼んでいました。

「仙川渓谷」とカッパ!?

当時の 「竹屋の川」（現「花の通学路」）と仙川との立体交差地点は、用水路の土手（堤防）が高く、カヤなど背の高い植物でおおわれていて、子どもには近寄り難い場所でした。用水路と下を流れる仙川との高低差が大きく、下を東西に横切る仙川は、上を流れる用水路から眺めると大変低く、私たち子どもにはまるで渓谷のように感じられました。

そして、用水路の下部の分厚い壁を突き抜いて、トンネルのように仙川が通っていました。そこは赤土（関東ローム層）がむきだしになるまで深くえぐられた、すり鉢状の沼地のようになっており、流水が涸れた時でも、そこにはいつも水が溜まっていて、皆から“底なし”と呼ばれ、子どもは近寄らないように言われていました。

当時小学 4～5 年だった私と友人たちは、怖いもの見たさに、時々土手から水面を眺めていましたが、ある時突然“ドボン”と何か大きな動物がその沼に飛び込み、泳いで潜っていくのを見ました。カエルにしては音や影が大きく、鳥や魚、カメなどでもなさそうでしたので、私たちは「カッパが出た



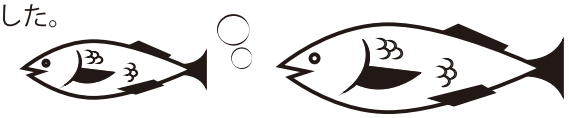
…」と皆に言いふらしましたが、誰も信用してくれませんでした。今考えると、ウシガエル（食用ガエル）ではなかったかな？と思いますが、本当のところはよくわかりません。

水路とくらし、水辺の生きものたち

仙川と交差してその上を流れる用水路は、流域に点在する農家が水を自分の敷地に引き込んだり、家の前の土手を切り開いて階段を造り、流水面まで降りられるようにして農機具や食器などを洗っていました。流水はたまに白濁水の時もありましたが、普段は澄んできれいだったと記憶しております。

そして、毎年春に流水を止め、川底をさらって、溜まった土・ゴミや流域に茂った草などの植物を取り除いていましたが、所どころに深く掘った水場があり、そこにフナやドジョウ、エビや小さいナマズなどが集まり、子どもだけでなく、大人たちまで網や“ふるい”などで捕っていました。

講座でお話をした時に、「ナマズなど捕って食べたのですか？」「花の通学路は、南に向かって上っているけれど、水は南の方へ流れていたのですか？」などの質問がありましたが、獲ったナマズやフナなどは皆子どもの指ほどの大きさで、食べたりはせずに防火用水などで飼いました。

春先から夏にかけて用水路には、オタマジャクシやカエル・エビ・フナ・エビガニ・ドジョウなどの他、水生昆虫のアメンボやミズスマシ・ゲンゴロウ・水カマキリ・タガメなどがいました。土手でヘビもときどき見かけました。

また当時、用水路の土手は両側の畑地などより、とても高くなっているところが多かったので、水路の埋め立てと土手の切り崩しとの関係で、現在の通学路の一部が南上がりになったのではないでしょうか…間違いなく水は、北から南方向に流れていました。